

ライフスタイルと学習スタイルで自分の学びを点検する

Checking Own Learning by Life Style and Learning Style

鈴木 克明^{*1}

Katsuaki Suzuki^{*1}

^{*1}熊本大学教授システム学研究センター

^{*1} Research Center for Instructional Systems

Email: ksuzuki@kumamoto-u.ac.jp

美馬 のゆり^{*2}

Noyuri Mima^{*2}

^{*2}公立ほこだて未来大学

^{*2}Future University Hakodate

Email: noyuri@fun.ac.jp

あらまし：大学生や新入社員を主たる読者層に想定し、自分の学びにインストラクショナルデザインの研究成果を活用する基礎を教えるためのテキスト『学習設計マニュアル』を準備している。本稿では、自分の学びを点検する一環として設定した第2章「自分の学習スタイルを把握する」の内容を紹介する。ライフスタイルとしては、アドラー心理学の能動・受動と対人・課題の2次元4種類を紹介した。学習スタイルはVAKTの分類枠とコルブの経験学習理論を紹介し、後者を拡充していく必要性を指摘した。

キーワード：学習スキル、高等教育、企業内教育、インストラクショナルデザイン

1. はじめに

インストラクショナルデザイン（以下、ID）は教育の効果・効率・魅力を高めるための知見を提案している領域で、半世紀の間に数多くのモデルや理論が提案されてきた⁽¹⁾。学習目標の明確化と一致した評価方法や、それを支援するための教育活動の構成方法等のIDの基礎を教えるためのテキストをシリーズ化し、刊行してきた。独学支援のための印刷教材の設計開発を扱った『教材設計マニュアル』⁽²⁾、初等中等教育の授業設計を扱った『授業設計マニュアル』⁽³⁾、社会人向けの組織における教育研修を扱った『研修設計マニュアル』⁽⁴⁾に続く第4弾として大学生や新入社員を主たる読者層に想定し、自分の学びにIDの研究成果を活用する基礎を教えるためのテキスト『学習設計マニュアル』を準備している。

大学教育への転換を図る入学生向け科目として、スタディスキルの育成や自己主導学習者への変容を促す試みは各地で試みられている。一方で、新入社員教育の段階でも学習者が受け身であり主体性に欠けていることが問題視され続けている。IDは教育提供者側の設計プロセスを支援するために応用され、例えば大学教員向けFDセミナー等でも紹介されてきた。教育の質改善を行うことは重要であるが、最終的には、自律的主体的な学び手を育てるためには、学び手自身にIDの素養を持たせることが不可欠になる。そこで、IDの成果を転用して学習スキル育成に資する手立てにできないかと発想したのが、このテキストである。

本稿では、自分の学びを点検する一環として設定した第2章「自分の学習スタイルを把握する」の内容を紹介する。

2. 第2章の概要

第2章「自分の学習スタイルを把握する」は、表1のように構成されている。章の位置づけ図に続いて、章の冒頭に以下の3つの学習目標を掲げている。

第2章の学習目標

1. ライフスタイルの違いについて、能動・受動と対人・課題の2次元に整理し、それぞれ例を挙げて説明できる
2. 学習スタイルの違いについて、VAKTなどの分類枠を活用して、自分の傾向と学習への活かし方について例を挙げて説明できる
3. 学習スタイルを拡張する方法について、コルブの学習スタイルの4タイプと3段階を使って、これまでの経験を振り返り、今後の計画を立案できる。

表1：第2章の章構成

| |
|---|
| <p>章の位置づけ図</p> <p>学習目標</p> <p>「自分の学びと向き合う：最初に考えてみよう！」</p> <p>1. ライフスタイルを4つに分けてみよう</p> <p>1.1 10歳までにライフスタイルは決まる：2つの軸で整理する</p> <p>1.2 ライフスタイルを4つに分けて考える：アドラー心理学の分類</p> <p>2. 学習スタイルを調べてみよう</p> <p>2.1 学習スタイルのVAKTモデル</p> <p>3. 学習スタイルを拡充・成長させる</p> <p>3.1 コルブの経験学習理論と学習スタイル</p> <p>3.2 学習スタイルを広げることが学び方を学ぶこと</p> <p>「考えてみよう！」</p> <p>事例</p> <p>学ぶ側—佐藤さんの場合：</p> <p>教える側—高橋君の場合：</p> <p>練習</p> <p>フィードバック</p> <p>参考文献</p> |
|---|

注：暫定使用版であり、出版時には異なる可能性がある

学習目標の直後には、これまでの経験を振り返って章の内容を学習する方向づけを行う「自分の学びと向き合う：最初に考えてみよう！」があり、本文に続く。本文の後には、読んで考えたことの省察を促す「考えてみよう！」があり、学ぶ側と教える側で何を考えたかを示す事例に続いて練習問題と解説（フィードバック）が配置されている。各章の構成はこれまでのシリーズで採用してきたものを踏襲し、全章共通となっている。

3. ライフスタイル：アドラー心理学

学習スタイルへの導入的な位置づけで、第2章ではアドラー心理学の能動・受動と対人・課題の2次元4種類を紹介した(図1)⁽⁵⁾。ライフスタイルは10歳までに決まっていると説を紹介し、自己のライフスタイルはどの側面が強いかを認識してもらう。それと同時に、自分とは異なることを重視するライフスタイルも存在することに気づかせ、対人関係の基礎を得てもらうのがねらいである。

4. 学習スタイル：VAKT からコルブへ

学習スタイルについては様々な分類があり、これまでもいくつか紹介されてきた⁽⁶⁾。本章では、まず、どのような学び方を好むかによって、視覚型(V)・聴覚型(A)・運動感覚型(K)・触覚型(T)に学習者をタイプ化するVAKT分類⁽⁷⁾を取り上げた。それぞれのタイプの学習者にはどのような学習へのヒントがあるかを紹介し、学習スタイルを知ること自分なりの学び方の糸口になることを述べた。

次に、コルブの経験学習モデルに基づく学習スタイルについて紹介した。コルブは、学習とは知識を受動的に覚えることではなく、自分の経験から独自の考え方を紡ぎ出すこと、つまり「経験を変換することで知識を創り出すプロセス」であると捉え、①具体的な経験をし、②その内容を振り返って内省することで、③そこから得られた教訓を抽象的な仮説や概念に落とし込み、④それを新たな状況に適用するという4つのステップにモデル化した。学習サイクルとして紹介され、大きな影響を与えてきた⁽⁸⁾。

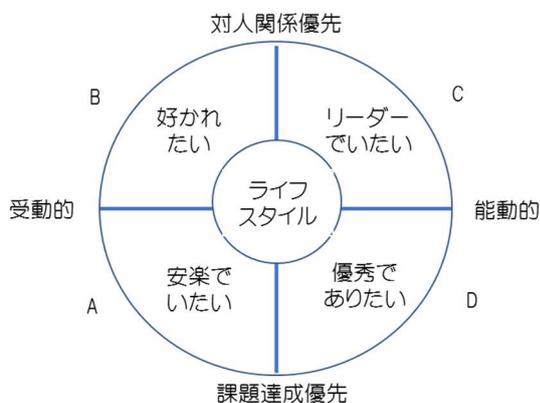


図1：4つのライフスタイル⁽⁵⁾

他方で、コルブの経験学習モデルの4つのステップは、学習スタイルを見極める枠組みにもなっている⁽⁹⁾。図2に示すように、発散型・同化型・収束型・適応型のどのタイプを得意とするかで学習スタイルが定まり、これまでに蓄積してきた学習経験や仕事として求められることの種類により、現在の得意・不得意が決まっていると捉える。さらに、この枠組みの不得意領域を身につけていくことで学習スタイルを拡充していくことこそが学びのプロセスであるとする段階説もあり⁽⁹⁾、学習スタイルから学び手としての成長を展望する課題に結びつけることにも活用した。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 15H02932 の助成を受けている。

参考文献

- (1) 市川尚・根本淳子(編著)(2016)『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北大路書房
- (2) 鈴木克明(2002)『教材設計マニュアル』北大路書房
- (3) 稲垣忠・鈴木克明(編著)(2014)『授業設計マニュアル ver.2』北大路書房
- (4) 鈴木克明(2015)『研修設計マニュアル』北大路書房
- (5) 向後千春(2015)『アドラー“実践”講義 幸せに生きる』技術評論社
- (6) 鈴木克明・根本淳子(2011.9)「米国の大学で用いている学習スキルの教科書に見られる工夫：多様性と個性伸長に関する章を中心に」日本教育工学会第27回全国大会(首都大学東京)発表論文集 849-850
- (7) タンプリン・ウォード、植野真臣ほか訳(2009)『大学生のための学習マニュアル』培風館
- (8) 松尾睦(2006)『経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス』同文館出版
- (9) 青木久美子(2005)学習スタイルの概念と理論—欧米の研究から学ぶ。メディア教育研究:2(1), 197-212

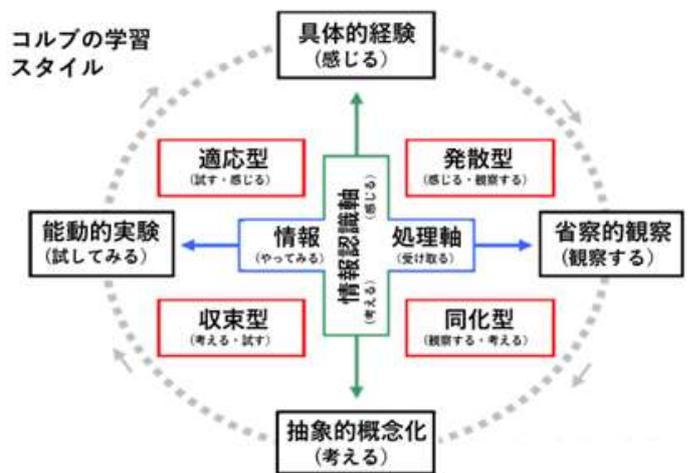


図2：コルブの経験学習サイクルと学習スタイル

注： <http://www.businessballs.com/kolblearningstyles.htm> を筆者らが和訳した。